

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 12年11月 ～底入れを探る生産活動

経済調査部門 経済調査室長 斎藤 太郎

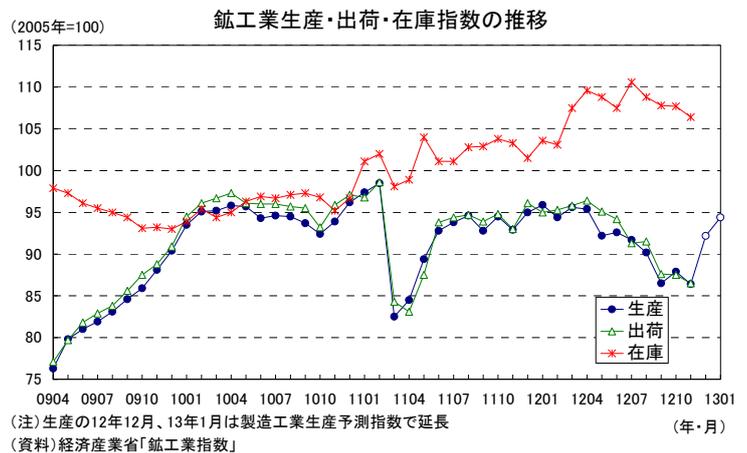
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 鉱工業生産は2ヵ月ぶりの低下

経済産業省が12月28日に公表した鉱工業指数によると、12年11月の鉱工業生産指数は前月比▲1.7%と2ヵ月ぶりの低下となり、事前の市場予想（QUICK集計：前月比▲0.3%、当社予想は同▲0.5%）を大幅に下回った。出荷指数は前月比▲1.1%と3ヵ月連続の低下、在庫指数は前月比▲1.2%と4ヵ月連続の低下となった。

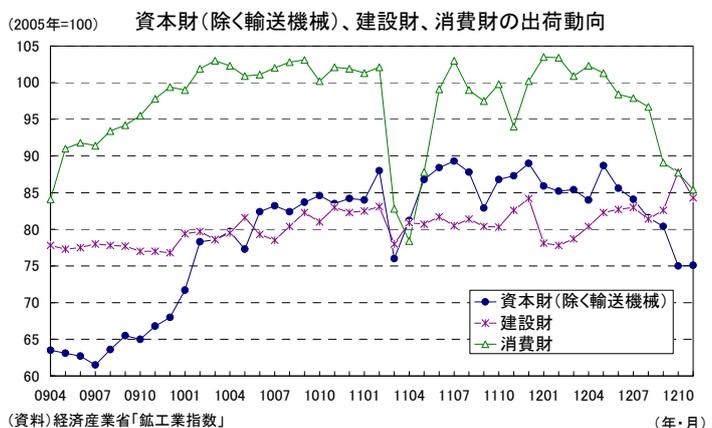
11月の生産を業種別に見ると、スマートフォン向けの需要拡大などを背景に電子部品・デバイスは前月比1.3%と好調を維持したが、情報通信機械が前月比▲8.2%と大幅な低下が続き、10月に6ヵ月ぶりの上昇となった輸送機械が前月比▲1.2%と再び低下した。

速報段階で公表される16業種中、11業種が前月比で低下、5業種が上昇した。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は12年7-9月期の前期比▲4.8%の後、10月が前月比▲6.7%、11月が同0.1%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は12年7-9月期の前期比0.6%の後、10月は前月比6.3%、11月が同▲4.0%となった。GDP統計の設備投資は12年7-9月期に前期比▲3.0%と大きく落ち込んだ。建設投資は底堅さを維持しているものの、機械投資の落ち込みが続いているため、設備投資は10-12月期も低調な動きが続く可能性が高いだろう。

消費財出荷指数は12年7-9月期の前期比▲6.1%の後、10月が前月比▲1.6%、11月が同▲2.6%となった。10、11月の平均は7-9月期よりも▲8.5%も低い水準とな



っている。GDP統計の民間消費は12年7-9月期に前期比▲0.4%と6四半期ぶりのマイナスとなったが、10-12月期も減少する可能性が高い。

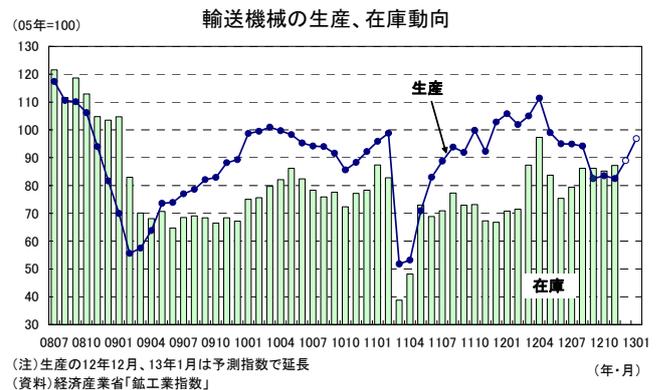
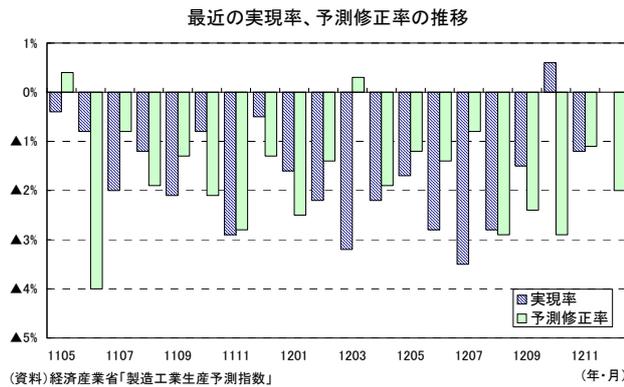
2. 生産は年末から年明けにかけて底入れを探る展開へ

製造工業生産予測指数は、12年12月が前月比6.7%、13年1月が同2.4%、生産計画の修正状況を示す実現率（11月）、予測修正率（12月）はそれぞれ▲1.2%、▲2.0%となった。

10月に2年3ヵ月ぶりにプラスとなった実現率は再びマイナスとなった。ただし、近年は生産の回復局面においても生産計画が下方修正される傾向が強くなっており、今回のマイナスをそれほど悲観的に捉える必要はないだろう。

予測指数を業種別に見ると、12月は非鉄金属（前月比▲0.4%）を除く全ての業種が増産計画となっており、特に情報通信機械（同14.7%）、電子部品・デバイス（同16.9%）が高い伸びとなっている。ただし、11月は両業種ともに実現率が大幅なマイナスとなっており、12月の生産計画の伸びはかなり割り引いてみる必要があるだろう。

一方、12月が前月比7.8%、13年1月が同8.9%と2ヵ月連続で高い伸びとなっている輸送機械は、計画と実績の乖離が比較的小さい業種であること、減少が続いていた国内の自動車販売が持ち直しつつあることを考えれば、計画に近い伸びが実現する公算が大きい。生産減少の主因となっていた輸送機械が再び増加する可能性が高まったことは明るい材料と言えるだろう。



12年11月の生産指数を12月の予測指数で先延ばしすると、12年10-12月期は前期比▲0.7%の低下となる。3四半期連続の減産は確実だが、7-9月期の前期比▲4.2%からはマイナス幅が大きく縮小するだろう。鉱工業生産は年末から年明けにかけて底入れを探る展開となりそうだ。輸出の下げ止まりが確認されていないことが懸念材料だが、中国をはじめとしたアジア経済に回復の動きが見られること、最近の円安の進展が追い風となることから、輸出は近いうちに持ち直しに向かうことが見込まれる。現時点では、鉱工業生産は13年1-3月期には4四半期ぶりに増加すると予想している。

なお、10月分の公表時点では、早ければ9月が生産のボトムとなる可能性があったが、11月の生産水準が9月を下回ったことでその可能性は低くなった（ただし、11月の速報値が確報値で上方修正されれば、9月が底となる可能性もある）。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。